

[学会賞関連記事]

日本環境学会賞（若手奨励賞）

ヒューマンディメンションを日本に定着させることを目標とした研究 —環境との共存を目指す社会調査の実践—

桜井 良（立命館大学政策科学部）

この度、日本環境学会賞（若手奨励賞）を受賞させて頂くことになりました。私の今日までの業績を評価してくださり、このような栄えある賞を頂けることとなり、大変光栄に存じます。皆様方の過分なご評価に心より御礼を申し上げます。

私は、野生動物と住民との共存を実現するための地域づくりを行う実践科学であるヒューマンディメンション（Human Dimensions of Wildlife Management）を新しい学問として日本に定着させることを目標に、研究を実施してきました。野生動物と人との軋轢が起きる背景には、地域における過疎化・高齢化とそれに伴う農地管理や被害対策への労力不足など、社会的側面が大きな影響を及ぼしていますが、これまでわが国では野生動物に関する研究は、生態学など動物そのものを対象としたものが多く、社会的側面に焦点を当てた研究は不足していました。北米では、持続的な野生動物管理を住民主体で行うために、社会的側面に関する研究が不可欠であるという考えのもとに、ヒューマンディメンション研究が学問として根付いています。このような異なる日米の研究体制のもとで、私はまず人身事故等により、人との軋轢が特に多いクマ類に焦点を当て、社会的側面から住民とクマとの共存の在り方を研究することにしました。具体的には、住民のクマに対する意識や被害対策への行動意図を明らかにするために、兵庫県を調査地として、そこに住みこみ、現地での聞き取り調査やアンケート調査を通じて、住民参加型の野生動物管理を提案しました（桜井ら, 2011; Sakurai & Jacobson, 2011; 桜井ら, 2012a; Sakurai *et al.*, 2013; Sakurai *et al.*, 2014a）。また、住民の意識の深化や獣害対策の促進を効果的に行うために、兵庫県及び栃木県で実施されている普

及啓発プログラムの効果検証を実施し、プログラムの改善点などを明らかにしました（桜井ら, 2012b; 桜井ら, 2013; 桜井ら 2014; Sakurai *et al.*, 2014b）。いずれの研究においても、調査結果がその後、県の環境政策に反映されることを目指し、行政の担当者との共同研究として実施しました。

その後、野生動物管理以外の分野でも、ヒューマンディメンション（広義の社会科学）の概念や手法を用いた研究を行い、例えば神奈川県における住民参加型緑化計画（桜井ら, 2015; Sakurai *et al.*, 2015; 桜井ら, 2016a）や岡山県や宮城県における里海の再生に関する研究（Sakurai *et al.*, 2016; 桜井ら, 2016b; Sakurai *et al.*, 2017）を実施してきました。研究結果の一つとして、都市部においても農漁村地域においても、地域への愛着の有無が住民の保全活動への意欲に影響を与えていることが明らかになりました。現在は、里海をテーマに総合学習として海洋教育プログラムに取り組んでいる岡山県備前市立日生中学校において、教育評価に関する研究を行っています。同中学校において、私は実際に生徒とともに海洋プログラムに参加し、生徒の様子を参与観察し、また聞き取り調査を行い、プログラムを通じた生徒の意識や行動の変化を明らかにするとともに、中学生が地域の漁師と共に地元の海の保全管理に携わる地域密着型の「里海教育」の意義や可能性について調べています。

環境と共存する持続可能な社会を実現するために、少しでも意味のある研究ができるように、今後とも日々精進してまいります。

最後に、この場をお借りして、これまで大変お世話になりました方々に御礼を申し上げます。ま

ず、学部生の時に大変お世話になり、研究者を志すきっかけを頂きました慶應義塾大学の関根政美先生に御礼を申し上げます。更に大学院修士課程及び博士課程においてご指導頂きました米国フロリダ大学のジャコブソン・スーザン先生に深い感謝の意を表します。ジャコブソン先生には、研究、学問のことだけでなく、研究者としての姿勢や生き方について、大変多くのことを学ばせて頂きました。

野生動物管理における研究では、調査の設計や実施など研究の全てのプロセスにおいてご指導頂きました当時兵庫県職員でありました上田剛平様、また栃木県職員の松田奈帆子様、丸山哲也様に御礼を申し上げます。更に、ポストドクとしての2年間、大変お世話になりました横浜国立大学の松田裕之先生に感謝を申し上げます。そして、東京都市大学の小堀洋美先生におかれましては、私が大学院生の頃より、日本で研究を行ううえで、多大なご支援を頂き、深く御礼を申し上げます。更に現在、立命館大学における沿岸域管理・里海に関するプロジェクトチームでお世話になっているテーマリーダーの仲上健一先生、そして上原拓郎先生に御礼を申し上げます。

また、日本環境学会に心より御礼を申し上げます。初めて日本環境学会で発表させて頂いたのは2012年の別府大会でした。発表を聞いて頂いた先生方や参加者の方々から大変温かく、建設的なご指摘を頂きました。日本環境学会の大会は、実務者や研究者など多様な方が集い、多様な発表が行われ、毎年学ばせて頂くことが大変多いです。

最後に、両親と妻にも感謝したいと思います。両親の支えなくしては、留学することはできませんでしたが、その後の研究活動においては、妻の日々の励ましなくしては続けることが難しかったです。御礼を申し上げます。

改めまして、この度は、このような名誉ある賞を頂き、誠に有難うございました。

参考文献

桜井良・上田剛平・ジャコブソン, S. K (2011) 「地域住民によって語られる多様な意味を持つ存在としてのクマー兵庫県但馬地方における聞

き取り調査からー」『農村計画学会誌』. 第30巻, pp.399-404.

Sakurai, R., and S. K. Jacobson (2011) “Public perceptions of bears and management interventions in Japan”, *Human-Wildlife Interactions*, Vol. 5, No. 1, pp.123-134.

桜井良・上田剛平・ジャコブソン, S. K (2012a) 「兵庫県但馬地方におけるツキノワグマに関する住民意識調査ー政策・対策に反映させるための意識調査の設計及び実施ー」『野生生物保護』. 第13巻2号, pp.33-46.

桜井良・上田剛平・ジャコブソン, S. K (2012b) 「事前・事後アンケートから見るクマ対策住民学習会の効果ー兵庫県豊岡市日高町の事例よりー」『共生社会システム研究』. 第6巻1号, pp.380-392.

桜井良・上田剛平・ジャコブソン, S. K (2013) 「兵庫県但馬地域におけるクマ対策住民の効果測定ー学習会をきっかけとした参加者の意識や行動の変化」『野生生物と社会』. 第1巻1号, pp.29-37.

Sakurai, R., S. K. Jacobson and G. Ueda (2013) “Public perceptions of risk and government performance regarding bear management in Japan”, *Ursus*, Vol. 24, pp.70-82.

桜井良・江成広斗・松田奈帆子・丸山哲也 (2014) 「社会心理学理論を基にした野生動物に対する住民意識調査の実施とその検証ー計画的行動理論と野生動物に対する人々の許容性モデルの応用事例ー」『哺乳類科学』. 第54巻2号, pp.219-230.

Sakurai, R., S. K. Jacobson and G. Ueda (2014a) “Public perceptions of significant wildlife in Hyogo, Japan”, *Human Dimensions of Wildlife*, Vol. 19, pp.88-95.

Sakurai, R., S. K. Jacobson, N. Matsuda and T. Maruyama (2014b) “Assessing the impact of a wildlife education program on Japanese attitudes and behavioral intentions”, *Environmental Education Research*, Vol. 21, No. 4, pp.525-539.

桜井良・小堀洋美・菊池貴大・中村雅子 (2015) 「花と緑のまちづくり協議会の理事の立場による意識の相違と合意形成ー質的及び計量的分析からー」『人間と環境』. 第41巻1号, pp. 40-47.

Sakurai, R., H. Kobori, M. Nakamura and T. Kikuchi (2015) "Factors influencing public participation in conservation activities in urban areas: a case study in Yokohama, Japan", *Biological Conservation*, Vol. 184, pp.424-430.

桜井良・小堀洋美・中村雅子・菊池貴大 (2016a) 「住民のコミュニティへの関与度や愛着が緑化意欲に与える影響」『環境科学誌』. 第 29 卷 3 号, pp.137-146.

桜井良・太田貴大・上原拓郎・仲上健一 (2016b) 「岡山県日生町周辺の住民の沿岸エリアに対する意識－居住地別の分析より－」『人間と環境』.

第 42 卷 3 号, pp.18-26.

Sakurai, R., T. Ota, T. Uehara and K. Nakagami (2016) "Factors affecting residents' behavioral intentions for coastal conservation: case study at Shizugawa Bay, Miyagi, Japan", *Marine policy*, Vol. 67, pp.1-9.

Sakurai, R., T. Ota and T. Uehara (2017) "Sense of place and attitudes towards future generations for conservation of coastal areas in the Satoumi of Japan", *Biological Conservation*, Vol. 209, pp.332-340.

(ミニコラム)

ごみ(廃棄物)の処分, 発生, 収集, 資源化などの言葉を適切に使い分けよう

言葉が不適切で, 理解しにくい文が多い。自戒も含めて, 適切な言葉を吟味して選び, 正確にかつ理解しやすく書きたいものである。たとえば, ごみ(廃棄物)にかかわる以下の文はどこが不適切であろうか。

「全国の自治体は毎年, 発生した約 4500 万 t の家庭ごみを, 収集して処分している。」

一見問題がなさそうだが, そうではない。

まず, 「発生した」が不適切である。発生したごみは 4500 万 t 以上かもしれない。ポイ捨て不法投棄などが集計されていないからである。つぎに, 「自治体は家庭ごみを処分している」につなげるなら, 「家庭ごみ」が不適切。自治体は家庭ごみだけでなく, 「持ちこまれた」事業系のごみも処分しているから, 「一般ごみ」とすべきである。

それでは「自治体は 4500 万 t の家庭ごみを収集している」につなげるなら, 「家庭ごみ」は適切であろうか。やはり不適切である。なぜか。自治体は家庭ごみを収集し, その量は 4500 万 t と読めるから不適切である。4500 万 t には市民

による古紙や空き缶などの集団回収, 事業者による「持ちこみ」の約 1500 万 t が含まれる。したがって, 自治体が収集した家庭ごみの量は約 3000 万 t となる。

処分には中間処分と最終処分がある。たんに「処分」といえばこれら二つの処分は区別しないことになる。自治体は 4500 万 t のうち, 3000 万 t 程度を「燃やして, 埋め」て, 最終処分としている。他の 1500 万 t は「リサイクルセンター」などで, 「資源化」して, 中間処分としている。以上を考慮すると, 上の文の不適切な部分は, 以下のように修正されより適切になった, と思う。

「全国の自治体は毎年, 約 4500 万 t の一般ごみを処分している。」

不適切な言葉を排除しただけである。このように, たった一つの文でも, 適切な言葉を選び, 表現を吟味しないと, 理解しにくい, あるいは間違った文になるのである。

瀬戸昌之 (元・東京農工大学)